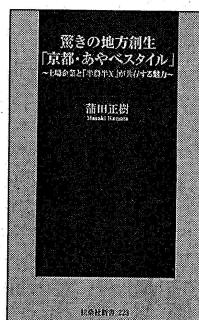


驚きの地方創生「京都・あやべスタイル」

蒲田正樹著(扶桑社新書・800円+税)



故郷の京都府綾部市を「本がお土産のまち」にしたいと私は願ってきた。お饅頭やお酒もいいが、本が売りの大人のまち。その夢を強力に後押ししてくれるのが本書だ。

「人生探求都市」。私は綾部のことをこう呼ぶ。真摯に己と向き合い、この時代をどう生きるかを模索する若人が綾部を旅する。そんな彼らに人生のヒントを提供できるまち。綾部には農家民宿やカフェなど人生の考える空間が既

にたくさん生まれている。

綾部といえば、多くの人は

「グンゼと大本教」をあげる。

綾部は合気道創始者・植芝盛

平が合気道の型を得た発祥

地、聖地でもある。戦後、日本で初めて世界連邦都市宣言をしたまちとしても知られる。エスペラント語が日本に広がる重要な役割も果たした。

50年前、「生きがい」とい

うことはがついた2冊の本が

出版された。精神科医の神谷

美恵子の『生きがいについ

て』と出口日出麿(大本3代

教主補)の『生きがいの探

キーワードは「生きがい」

評・塩見直紀

(半農半X研究所代表)

求』だ。このころから日本人の生きがいブームが起こっていくという。生きる意味を失いかけていたいま、「生きがい」は綾部発の大事なキーワードに育てるべきだろう。

時代予測が専門の谷口正和さんは「3店寄れば、マニアックゾーンになる」という。

居心地のよいカフェ、センスある雑貨屋、天然酵母のパン屋といった店がまちの一面にできると、それを求める人の流れができる。これは市町村という大きなエリアでも、商店街や限界集落といった小さ

なエリアにも応用できる考え方だが、綾部にはマニアックゾーンを形成できるキーワードが多く、私が20年前から提唱している半農半Xもそのひとつといえるかもしれない。

いま日本はすべてのまちが魅力を競い合う戦国の世。過去の精神遺産を超える新しい光を創出することが綾部にも問われている。綾部創業の上場会社の2社、グンゼは縦糸と横糸の重なりを、ねじメーカー・日東精工は絆経営を大事にしてきた。半農半Xは自己、他者、自然との関係性の回復がキーワード。次代のヒントはもう用意されていることを著者は教えてくれる。